

## 企画展

# 横浜市立大学コレクション 古地図の世界 地球のかたちと万国の大地

■会期 平成25年(2013)10月12日(土)~11月24日(日)

◆休館日：月曜日 ただし10月14日(月・祝)・11月4日(月・祝)は開館、  
10月15日(火)・11月5日(火)は休館。

■会場 横浜市歴史博物館 企画展示室

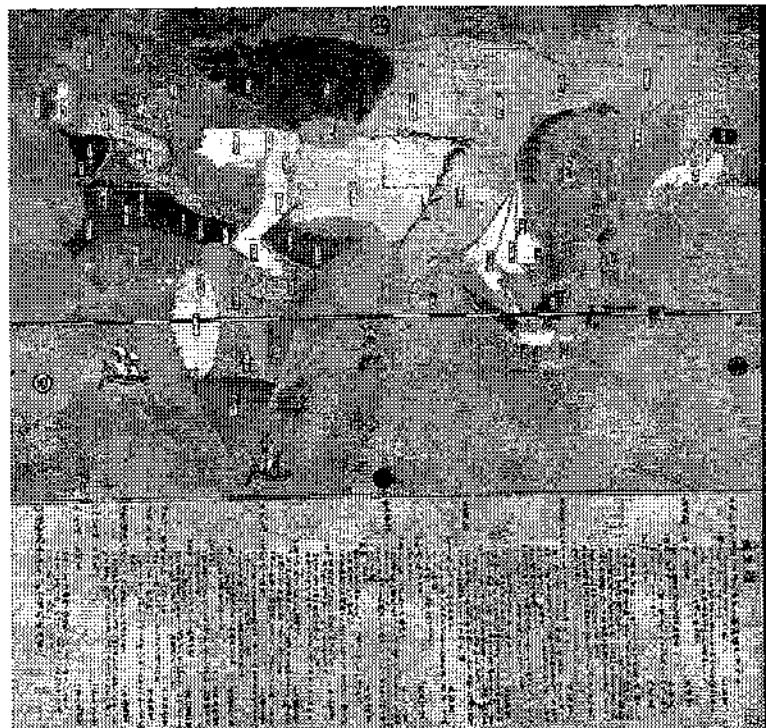
■主催 横浜市歴史博物館 ■共催 横浜市立大学 横浜市教育委員会

■協力 株式会社堀内カラー

古来、人々はさまざまな古地図・絵地図を作成してきました。それらは、それを描いた人々やその地図を受容・利用してきた人々の、生活世界や観念世界に関する意識や観念が図示化されたものであり、そこに表現されている事柄を手がかりにして、当時の人々の世界認識・地理認識を考えることができます。

横浜市立大学には、歴史地理学者・故鮎澤信太郎氏が収集した、江戸時代を中心とする古地図・地誌類や、仏教天文学(梵暦)に関する作品がまとまって所蔵されています。この展覧会では、これら古地図コレクションのうち、これまで公開されなかった作品をふくむ約60点を展示します。横浜市歴史博物館と横浜市立大学が連携・協力して開催する、初めての試みの展覧会です。

ここでは、古地図を通して江戸時代の人々が具体的に抱いていた世界・地域認識を知ることができると同時に、巨大な地球全図に収められた万国の姿、色彩豊かな大地の形から、作品としての美しさ、地理が次第に明確になる過程などをたどることができます。また、仏教が西洋天文学に出会うことによって、それまでの仏教的世界をどのように解釈しようと試みたのか、その思考過程をたどることができます。



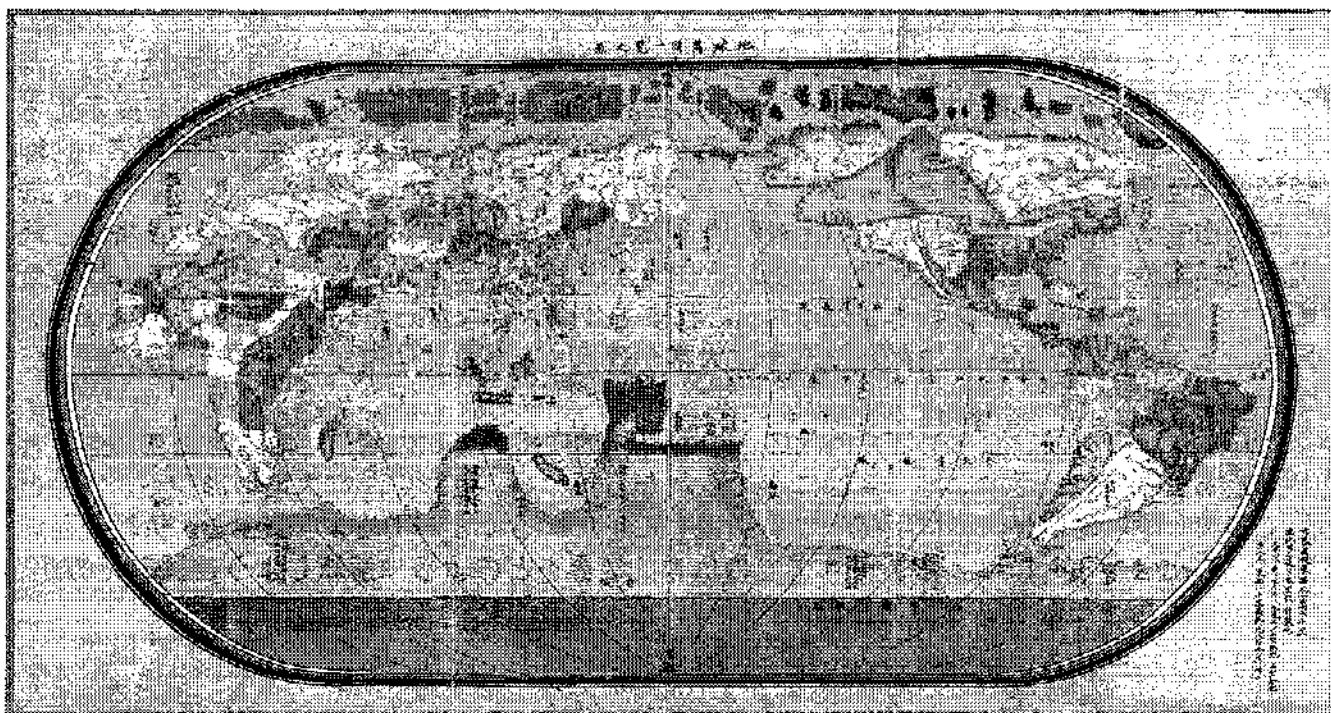
### 寛永輿地図

原題はなく、名称は故鮎澤信太郎氏による。上段にはアメリカ大陸を除いて、旧大陸を描く。日本はもっとも右端に位置する。下段には各湊までの距離と交易品が記されている。国名はアジア地域が漢字で、他の地域は多く平仮名で書かれている。横浜市立大学所蔵絵図のなかで、もっとも古い年紀「寛永十四年」(1637)をもち、初期的世界図として貴重。

## I 大地のすがた

世界図が日本に伝えられたのは江戸時代です。ヨーロッパで流通していた世界図は、イエズス会の宣教師であるマテオ・リッチ(1552~1610)が中国に伝えました。ヨーロッパの世界図は大西洋が画面の中心に描かれていましたが、中国で刊行されたものには漢字表記が施され、中国大陸が画面の中央に配置されていました。リッチが伝えた世界図は、その形から卵型世界図、リッチ系世界図といわれています。

日本では、17世紀後半以降、リッチ系世界図をもとに、長久保赤水(1717~1801)らが世界図を作成し、多くの派生した地図が生まれたほか、知識人によって最新の世界図も作られました。世界図の登場は、当時の人々に「世界」という新たな空間認識を作り出したのです。



地球萬國一覽之圖

マテオ・リッチ系卵型世界図の写。出版年は未詳だが、故鮎澤氏は17世紀後半と推定。アジアを除いて地名はカタカナが主。

## II 万国のすがた

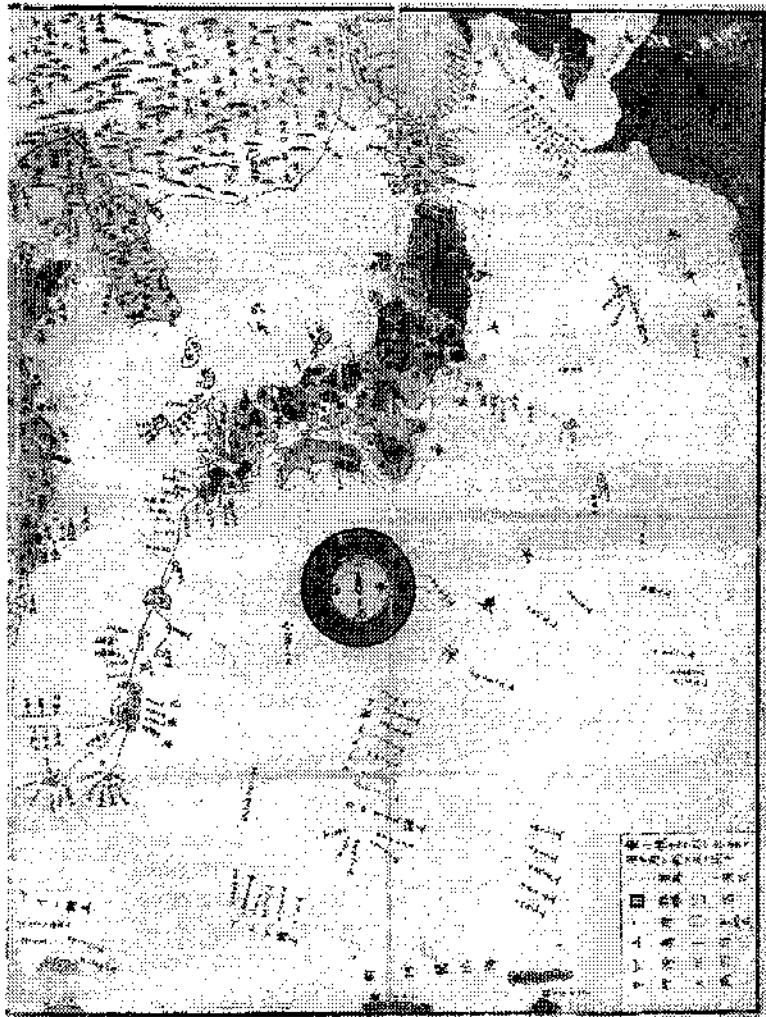
世界図は大地の輪郭とともに、そこに住む人々の様相をはじめ、漂流民、航路や万国旗などの情報も伝えました。リッチ系世界図や地球図にとどまらず、世界の説明が記され、正確な大地の輪郭よりも、多くの情報をわかりやすく載せた地図や、情報の精密さを追求した地図が作られました。同時に、万国の情報は人々の好奇心を刺激し、目で見て楽しむ万国のすがたが描かれました。まだ知ることができない「万国」の情報は、虚実が入り混じったものでしたが、新しい情報を知りたいという人々の姿勢は、未知なる世界に対する江戸時代後半の知識欲のあり方を示しています。

### III 日本図のすがた

江戸時代に展開した日本図の主な制作者は、浮世絵師・菱川師宣の弟子である石川流宣(1661頃～1721)と長久保赤水(1717～1801)です。

流宣による日本図が形の正確さではなく色彩や全体の美しさに価値をおきた大地の絵画であるとすれば、赤水の日本図は、初めて経緯線が入れられ、距離を図中の縮尺によって表現した画期的なものでした。測量にもとづく日本図は、伊能忠敬(1745～1818)によって制作されましたが、国家の機密として世間には出回らなかつたため、赤水による日本図が一般に広がつていひたのです。

一口に日本図といつても、(1)特定の島々や地域を中心に描いた日本の部分図にあたる描写、(2)日本全図に江戸からの距離が書き加えられてもの、(3)日本東西を旅する道筋や見所案内が描かれた道中図など、様々なスタイルの日本図が制作されました。



大日本唐土奥地全図（部分）

嘉永7年(1854)刊。日本・中国・朝鮮を中心に描いた図。林子平の「三国通覧図」に似るなど、古い地図が参考された形跡がある。

### IV 仏教的世界のすがた

前近代における人々の時間と空間の観念は、宗教的世界觀に支配されていたといつても過言ではありません。しかし、江戸時代に西洋から日本に流入した科学的な宇宙論は、それまで正しいと考えられていた仏教的世界觀を再考をうながしました。

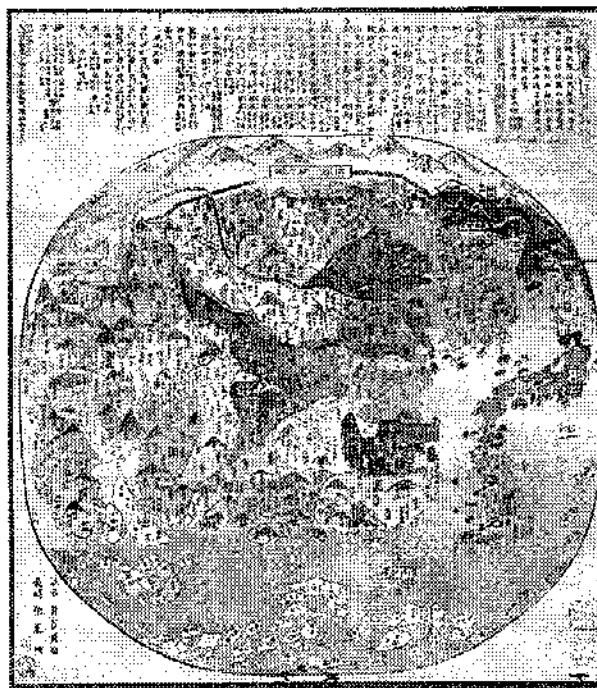
幕末から明治初頭の佛教界では、佛教的世界を科学的に証明するため、西洋天文学と佛教的世界觀とを合体させた新たな世界像と理論が考え出されました。それまで伝統的な世界であったインド・中国を中心とする佛教的世界図の端に新しくヨーロッパ大陸が描かれたり、佛教的世界図の中心である須弥山と現実世界が並列した世界図が登場したりと、宗教的真理と科学が真正面から対峙したのです。

佛教天文学の祖といわれる普門円通(1754~1834)の西洋天文学をふまえた須弥山世界の追究は、短期間に終わってしまいましたが、その間に刊行されたおびただしい数の著作は、今もなお解明し尽くされはしません。

## V 世界地域のすがた

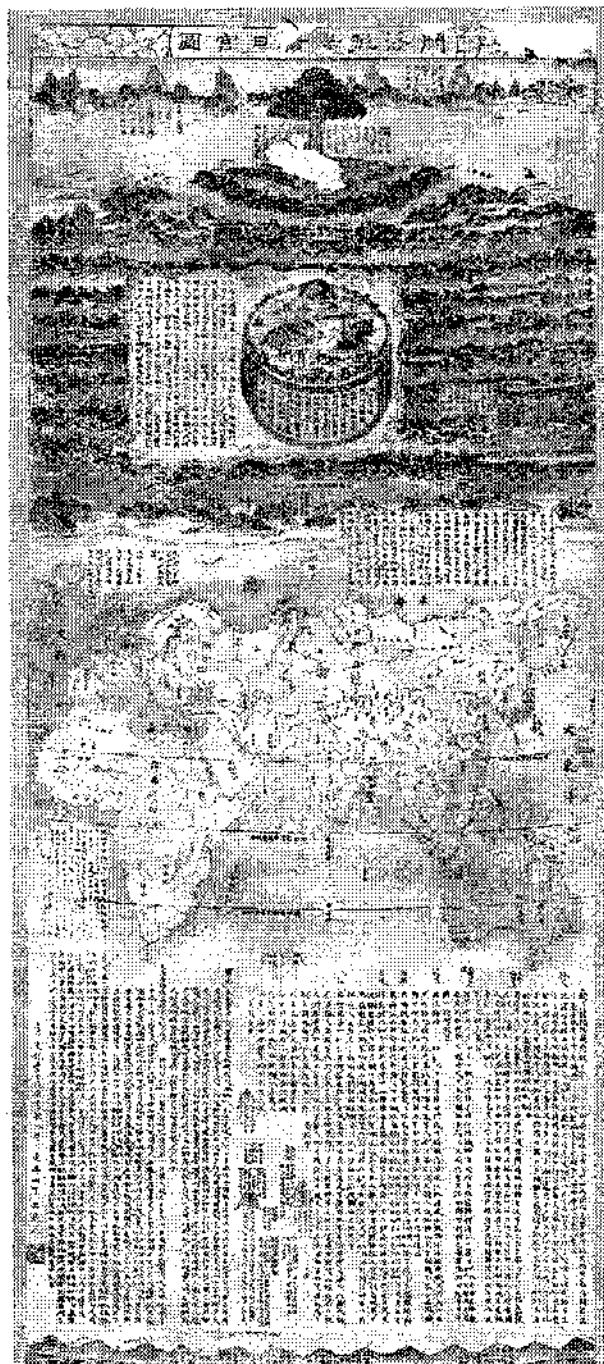
大陸が地域ごとに描かれたものを地域図といい、日本には世界の地域図が多く残されています。全体を描写した全図に比べて、地域図は各地域の特徴や、国土や領地に対する所有の主張を形や色によって表現し、個性的な構図をもったものが多くあります。

また、地域図は、国や国土の境界を区分する色彩をはじめ、山の起伏や川の流れが模様となる自然の景観や、都市や町の名前、主要な街道や道路がデザインのように描き込まれています。独自の視点にもとづいた地域図は、色や文字や構図によって巧に表現された「かたち」の芸術として十分楽しむことができます。



朝異一覽

清道光15年(1853)。中国、インド、朝鮮、琉球などを詳しく描き、日本は右に配置されている。また南方海上には南洋諸島や想像上の国が描く。



閣浮提圖附日宮圖

文化5年(1808)刊。僧存続が仏説によって描いた世界図。閣浮提圖の下に西洋からもたらされた東半球図も描かれる。地理上の東洋の上にそびえ立つようにして仏教的世界観が描かれ、当時の梵曆が目指した世界認識のあり方がみられる。